

インフォーマントへの報告

小林 初夫（奥羽大学）

勤務校のSD研修会で東日本大震災被災地の復興の現状について話すようにと依頼があり、調査のため被災地へ行った。行ったのは福島県南相馬市小高区で、私の出身地である。

南相馬市小高区は地震と津波で大きな被害を受け、さらに東京電力福島第一原子力発電所の事故により全住民に避難指示が出され、これまで平穏に暮らしていた人々が着の身着のまま県内外に散らばってしまった地区である。5年後に一部を除いて避難指示は解除されたが、帰還した住民は少なく、13年たった現在でも医療・福祉・商業などの生活環境の整備が不十分で帰還しない人が多い。

私は帰還した人たちから直接話を聞くために、戸別に訪問したり、集会所に集まっていたりして、帰還してよかったことや困っていることなどを聞いてみた。帰還してよかったことを聞くと、「やっぱり自分の生まれ育ったところはいい」「生き返った感じがする」「仏様やご先祖様のそばが一番安心できる」と、誰もが自分の家が一番であることを異口同音に語った。困っていることを聞くと、「店が少なく買い物に不便」「病院が少なく薬局もない」「家の片づけが進まない」「草木が伸びすぎて家の周りの仕事が重労働」と生活環境の整備を訴える声が多かった。調査に協力してくださった方々の中には知り合いも多く、テレビや新聞では報道されない本音の部分をつくさん聞くことができた。

ある高齢者のお宅で調査を終えて帰ろうとするとご主人が、「これ、ちょっくら見でくいろ」と、冊子のようなものが入った封筒を持ってきた。「調査だっていうがら、協力したんだげんちょ...」と言いながら中身を出すと、それは調査の報告書や抜き刷りだった。被災地にはいろいろな大学や研究機関からの調査が時々来ることは聞いていたが、協力者に送られてくる報告書や抜き刷りを見たのは初めてだった。「ちょっと拝見します」と言って、それらを少し読んでみた。避難生活に関する社会学系の調査や健康に関する医療系の調査の報告書は、方言学のものとは違い新鮮だったが、なじみのない用語や図表が多く、少し難しいものだった。「わがつか？」との問いかけに、「ちょっと難しいですね」と正直に答えると、「んだべ。こんなのもらったって、さっばしわがね」とご主人は共感した私に不満を語り出した。「報告書って、誰さ報告してんだべ？」「調査を命令した人さ報告してんだべが？」「俺だちさ報告してんだべ？」「俺だちさもわかるように書いてもらいでえ」「んでねっか、報告でねえべ」。ことばの一つ一つが私の心に突き刺さった。

かなり前のことであるが、同じようなことばを方言調査のインフォーマントから言われたことがある。ある村で農閑期に調査を行った。そのときにたくさんのインフォーマントをご紹介くださり、ご自身もインフォーマントとしてご協力くださった区長さんは先祖代々続く農家を守り、村の世話役なども積極的に引き受ける地域のリーダーであった。初めてごあいさつに伺ったときから親切にしてください、食事をごちそうになったり、おみやげにと自家製の野菜を持たせてくださったりと、並々ならぬお世話になった。どんなことをお願いしても、「むずがしごどは、わがねげんちょ、わがっことなら、なんぼでも協力しっぺ」と快く引き受けてくださった。おかげで調査はスムーズに進み、たくさんの方言を記録することができた。後日お礼状を出し、しばらくしてから出来上がった報告書を持参して区長さんを訪ねた。報告書を手にした区長さんは最初にこやかだったが、ページをめくっていくうちに、だんだんと表情が硬くなり、しばらくして、「なんだが、ちんとむずがしな」と言った。喜んでもらえるとはばかり思い込んでいた私にとって、この一言は衝撃的だった。よく聞いてみると、区長さんは方言集のようなものを期待していたのだという。一般に方言調査というと、方言語彙（俚言）を採集して記録する、というふう理解されている。まして、郷土愛にあふれ、方言への愛着も人一倍強い区長さんならそう期待

するのは当然だろう。私は事前の説明不足を詫び、区長さん宅で開かれた報告会でインフォーマントのみなさんに改めて調査の目的と調査結果をわかりやすく説明した。参加者からは方言にまつわる思い出やエピソードが次々に出され、とても楽しい報告会となった。

調査結果は学界に報告するだけでなく、インフォーマントにも報告するものである。そのためには、一般向けのわかりやすい報告書や報告会は必要なものだろう。最大の協力者であるインフォーマントに理解してもらうことは大切なことであり、内容がわかる報告でなければ、報告にはなっていないのである。